

『マーク・トウェインの自伝Ⅰ』における 人間性の探求に関する一考察

金 谷 良 夫

マーク・トウェイン像を明らかにする方法の一つとして彼の最新の自伝を繙く必要がある。カリフォルニア大学、バークレー校のマーク・トウェインプロジェクトによって長い年月をかけた『マーク・トウェインの自伝Ⅰ』（以下『自伝』と略記）が2010年に出版され、最早50万に及ぶ部数に達している。このことはそれだけトウェインという作家自身がアメリカ性を物語っているだけでなく、そのなかで人間性の探求が脈々と行われているからでもある。

2010年という年はトウェイン歿後100年である。編集主幹のハリエット・スミスは「過去の出来事を顧みると、マーク・トウェインのような人気作家が『100年間抑制された』作品を発表することは注目を浴びる運命にあったのは明白のようだ」（筆者への文書より）と述べている。トウェインはあるとき「私の作品は水だ。水は誰でも飲む」と述べたが、自伝についても万人を意識していたと言ってよい。それを意識したからと言って彼が『自伝』においてすべて真実を語ったとは限らない。むしろ、究極的に見るとトウェインはやはりフィクションとノンフィクションとの間に位置し^{はざま}真実をすべて語れたとは言いがたいのは、死後100年経っても「表現を恐れる」意見があるからであり、またトウェインも自ら述べるし、また彼の母親も言うように、「彼の言うことは非の打ち所がなく非常に貴重だが、脚色部分である30パーセントを割り引いて」考える所以である。また、マーク・トウェインプロジェクト所長のロバート・ハーストはそれまでの自伝はトウェインが意図したものとは言えないばかりではなく、的確に編集されたものでもないが、本『自伝』について「われわれにはついにマーク・トウェインが膨大なテキストをもってなしおえたかったものが分かるし、……われわれ皆が1909年の12月にトウェインが自伝を終えて以来、はじめて彼の最後の主要文学作品を読むようになったのだ」と述べているからである。

トウェインは大まかに言えば1870年から1909年まで40年間作家として、ま

た大半は晩年に書いたとは言うものの断続的に「自伝」に取り組んでいるが、それだけ費やした自伝の執筆だからこそ彼の自伝は彼のアイデンティティの一面と言ってよい。なぜならトウェインは、『自伝』のハリエット・スミスの序説のなかで、トウェインの言葉である「事実、私の本は単に自伝だ」ということを述べているからであり、事実トウェインの作品に関して他の作品も自伝的要素が濃いからである。トウェインの自伝的な三部作と言われる『トム・ソーヤーの冒険』（1876）、『ミシシッピの生活』（1883）そして『ハックルベリ・フィンの冒険』（1885）は、それぞれ基本的にトウェイン自身が体験した生活に基づかれたフィクションとしてストーリーが語られているからだ。トウェインはハックを通して『ハックルベリ・フィンの冒険』のなかで、『トム・ソーヤーの冒険』は「マーク・トウェイン氏によって概ね真実が語られている」と書かせている。トウェインは事実『トム・ソーヤーの冒険』に登場する人物は実在した人間であると述べているし、一方『ハックルベリ・フィンの冒険』についても、実在したトム・ブランケンシップをモデルとしてはいるもののトウェインの分身の一部と見做されるハックの透徹した目を通してトウェインが生きた世界の真実をありのままに語らせているからだと言えよう。『ミシシッピの生活』（1882）についてはとりわけ自伝的要素が強いのは明らかだ。『トム・ソーヤーの冒険』においてマフ・ポッターとインジャン・ジョーとの対決の法廷で弁護士がトムに対して言う「真実は常に尊敬に値する」という表現は表面的には正しいが、根底には歪められた真実も含まれている。だからこそ、『自伝』においてトウェインは次のように述べている。

一つのきちんとした理由から、私は自分の生きた言葉というよりむしろ墓の中から話すのは自由に話せるからである。人はプライバシーを扱う作品を書くとき、つまり、まだ生きてるとき読まれる本であれば、その人は自分の心を曝け出して言うことに怯んでしまうし、そうしようとすればすべての試みが失敗し、人間にとって全く不可能なことをしようとしていることが分かるのだ。

しかし、つまるところ、こうしたトウェインの作品を読み解くと、それがフィクションであろうとノンフィクションであろうとトウェインはその間に位置し

ウェインは行きつ戻りつという立場をとり、絶妙な語り口によって、概ね「真実を語って」といって捉えられる。さらに、トウェインが真に望む本書は、事実文学形式をとっているからだ。彼は、自分の目で見えてきた事実を踏まえてフィクションを語っており、晩年になるにつれ、真理を極め真実をより前面に打ち出す傾向にあるとすることができる。

トウェインが本領を発揮するのは一つには人間観察における人間性の探求だと言えるだろう。彼はたとえば『ミシシッピの生活』において、ありとあらゆる人間性に触れたと述べており、彼は人間を観察する目を常にもっていたからこそあらゆる読者がそうした人間性探求において人間の普遍的な事実として捉えたのではないか。彼自身『自伝』で「人間性は皆似ている」と述べているし、「われわれは奇妙に作られている」というように人間性を正確に捉えていたことが読み取れる。ここでさらに、本書の随所にみられる人間性の探求に目を向け、普遍的な人間性の特質を見てみたい。

トウェインは、人間性は皆同じだという視点に立ってアメリカの村の人々の例を出している。

人間性が示しているのは、われわれは大物がしていることを知りたいと思っていることはわれわれが大物を羨ましく思えるからである。人間性が示すのは村の有力者は、アメリカ合衆国がその国に対して帯びる関係と同じ割合で村の庶民に対して帯びているのだ。人間性が示すのは、人目を引くことが唯一われわれの興味と多かれ少なかれわれわれの崇拝の念を支配する人に必要なのだ。われわれには人生において適切な焦点を些細なことに合わせれば、些細な出来事など皆無なことが分かるのだ。

人々は村であっても、そうした些細なことが国の重要な出来事と同じように見做すのである。自己顕示欲は人間性の一部なのだ。

トウェインは、自作の警句のなかで「事実に関して確かなことを得る最良の方法は、誰かの裏づけない意見を真に受けるのではなく、自分で行って調べてみることだ」と述べている。その適例として『自伝』にある有力な「シカゴトリブューン紙」でさえ、なにも創造しないで不正直な他紙の見解を鵜呑みにしてしまう事

実を暴露することだ。『自伝』において「人間の性格」と題したセクションを見ると人間性が如実に浮き彫りにされる。たとえば、「あらゆる生き物は殺す——例外はないように見えるが、全体の分類の中で人間は楽しみでそれをする唯一のものだし、悪意を持ってするし、報復をする唯一のものだ。同様に——全ての分類のなかで悪意のある心をもつ唯一の生き物だ」とトウェインは人間を揶揄する。次の例も大いに説得力がある。「われわれには二つの意見があり、われわれが表現し難い私的なものと——もう一つは——われわれが使うもの」という表現はまさにわが国における本音と建前論に当て嵌めてみることも可能だろう。決定的例を拾うと、嘘に言及し、「寛容についてありとあらゆる場所でいろいろな話があるが明らかにそれは細やかな嘘である。……人間の本性の主要動機はただそれだけ——自己本位だ……死においても自己本位だ」ということだ。さらに、トウェインは「人間は密かに利己的な目的を抱いており、……かつ物乞いだ」と指摘する。

さて、時に、われわれ万人は手斧を持っているし、持っているに違いなく、それを断つことはできないことから、それを断つ最良の方法がなぜ誰か賢く思慮深い人によって発明されてこなかったのか。理由は一つしかないのは、有史以来人類のあらゆる成員は、他の誰もが手斧を持ち物乞いであるということを恥じることや怒って承認しない思いを抱き認識するなかで、常に人間にはそうした汚点がないという迷信から自分を欺いてきたのである。したがって人間にとって人類の援助や利益のために人間に利するところのないもくろみに手を差しのべるようなことはまず起こりはしないのである。それが人間性だからである。

ここに見る「手斧」とは 1815 年にフランクリンに帰せられた話から少年を煽って斧を研かせたという利己的な目的や下心があることを意味する。トウェインがこれを考える契機となったことは、自分の作品の原稿をトウェインに評価してもらいたいために勝手に送ってきた者を戒め例示する意味で書いたのであろう。このようにトウェインは人間全体を嘲るのである。ただ、次の例のように自分自身もその人類に属することを認めているのだ。ではその例を引いてみよう。

私は自分より卑劣な人をほとんど知らない。幸運にも私のこの特質は表面に頻繁にでることはない。だから私の妻を除いて家族の誰もが私の中にあるそうした特質をどれだけ訝しがったかは疑わしい。機会があってもそれが表面にでることは全くなかったと思うが、実情は前述したようにそうした機会がめったに起こらなかったのこうした私の資質の最悪の特徴は二人以外誰にも知られなかった——それに悩んだクレメンズ夫人〔トウェインの妻〕とそれが原因で彼女を泣かせた記憶で悩む当の私である。

自分だけを例外にしないのが人類を代表する彼の特徴である。よく一般にトウェインの晩年の思想に関して、厭世思想や決定論が論じられるが、彼が晩年ことごとく悲観的な要素だけを表したのでない。彼は、人は48歳をすぎても楽観的であったり、48歳以前に悲観的になったりする場合は人生を知らなすぎる旨の格言を残したが、『自伝』では悲観的過ぎた兄のオーリオンを引き合いに出し「悲観主義者は生まれつきで、後天的ではない。楽観主義者は生まれつきで、後天的ではない」と述べている。人の性格が明るいか暗いかに係わる特質も人間性そのものだ。

マーク・トウェインが生涯において持っていた人間観察の目の冴えは今われわれが彼の没後1世紀経っても決して古びていない、すなわち彼の示す人間性は古くて新しい普遍的な特徴である。本書のなかで人間の営みという現実を文字から読むと時には極めて厳しいものになるし、同じく人間性の特質であるユーモアを介して見れば、実際深刻なものであってもそれほど深刻にはならないだろう。ここに述べたトウェインの人間性の探求の例は一部にすぎないかもしれないが、それは本書においていたるところに力強く表現されている。トウェインの慧眼をもってわれわれは人間の真理を見つめることができるだろう。